

<おしくらまんじゅう>春先からツバメが5か所ほどで巣作りを始めていました。ところが二度三度と落ちてしまう巣とか放棄されたような巣が見られ子育てがあまり旨くないようでした。そんな中ひとつだけ無事に巣立ちまでこぎつけたカップルがいました。4羽のヒナがあつという間に大きくなり“押し合いへし合い”状態で巣の端も崩れてきました。その後、数日でヒナたちは巣立ちました。ところで親たちは1日にどれ位の虫を運ぶのでしょうか。



<オアシス> 夏のビオトープは生き物たちで満ちています。写真はヒシ、ヒルムシロの花、ホソイそしてホバーリング中のヤブヤンマ(?)です。岸边ではオオアオイトトンボ(♂)の金属光沢が目につきます。匠(たくみ)の手による宝物のようです。また周りの斜面に生えるウツギの若い実にはオオシオカラトンボのメスが珍しく羽を休めていました。ムギワラトンボとも言われるシオカラトンボのメスに比べるとどっしりとした感じがします。同じようなポーズのオオシオカラトンボのオスも載せておきます。こちらは顔が真っ黒です。



<日向>水辺の日向ではミソハギが元気よく育ち、もう少し水気の少ない日向ではヤマユリ、ムラサキシキブ、ノリウツギが昨年と時期を違えず花を咲かせています



<ヒシ、ヒルムシロ、ホソイ、ヤブヤンマ?>

(ビオトープの四季No.11参照)。さらに乾いた野辺ではコマツナギがフジの房を小さくして上に向けたようなピンクの花を付けています。名の由来“駒繋ぎ”(馬を繋ぎとめても大丈夫な位に丈夫)のとおり、



<オオアオイトトンボ>

茎は強く根もしっかりと地面に広がっています。この植物の学名に Indigo の名があるので気になり調べたところ、インド藍の素がナンバンコマツナギでコマツナギを大きくしたような植物と分かりました。近くの野辺や道端に藍染と関わりの深い植物があるとは、何となく嬉しくなりますね。

<オオシオカラトンボ上:♀、下:♂> (藍染の原料) コマツナギは *Indigofera pseudo-tinctoria* Matsum. でナンバンコマツナギは *Indigofera suffruticosa* です。日本のものはイヌタデの仲間タデアイ (*Persicaria tinctoria*) を用います。世界中にはインジゴを含む様々な植物があります。



<コマツナギ>

(文と写真: 松本正勝)